

# 社説

## 大鹿村とリニア

平行線だつた。

JR東海が今月、下伊那郡大鹿村で開いたリニア中央新幹線の事業説明会。人口1100人の村で、300人が近くが出席していた。

工事への理解を求めJRに対し、住民からは「風景は一度失つたら取り戻せない」「JRの利益の裏返しが村の犠牲だ」という根本的な反論が相次いだ。

大鹿村は今までいい。そが印象に残った。う訴える若い世代が多くた」という根柢返しが村の犠牲だ」という根本的な反論が相次いだ。

## 若い世代が見つめる未来

質疑応答は2時間半に及んだ。「所得は少ないが、村民は豊かな自然の中で生きている」「手を付けなければ山は壊れない。水が枯れることも、生命が失われることもない」。質問というより訴えに近い発言が続いた。

JR側は「切実な心配を受け止め、少しでも解消したい」と返すのがやっと。「地元の理解と同意のため、少しでも解消したい」と返すのがやっと。

このままでいい

会場には真剣に説明を聞く子どもたちがいた。飯田市内の中学校に通う杉浦夏音さん(15)は「大鹿の豆腐や塩は、おいしい水で作ら

き入れられないことが、JRに対する住民の不信を高めているのだろ。出席者からは「一方的だ」と憤る声が上がった。

育む会が始めたのは、リニア計画が具体化し始めた2010年の秋だった。情報を集め、村の人たちとともに理解を深めようと、新

聞を発行してきた。今は10~70代の40人が参加している。村の特長を知ろうと、古老

「暮らし」がある。用意したのは、住民有志でつくる「大鹿の100年先を育む会」だ。

「もう暮らしていきたいのか、村のみんな話し合い、まとまりのあるエネルギーに変えていく」と話した。

「リニアの夢」が始まったのは、もう一つの有志団体「NO-LIN

ニア連絡会」代表の山根沙姫さん(36)も思いは同じだ。リニアに賛成か反対かで、人間関係がこじれるでは意味がない。「小さな村だからこそ対話を重ね、何ができるのかを考えたい」。村民の意思を諦めることなく全国に発信す

るつもりでいる。

大鹿村の人口の3割を一ターン

者でなく、将来をどう成り立たせるかにある、と前島さんは感じている。「どう暮らしていきたいのか、葉も。〈その向こうから「いいもの〉が来たことは一度もない」

がなければならない」と何度も繰り返した。

大鹿村は以前から、小渋川の橋を地域化するよう求めている。が、JRは説明会でも「工事の難度が増す」として受け入れなかつた。環境保全協定の締結については「考えていない」と回答。変電施設の送電線を地中化する要望に関しては、「何の説明もなかつた。

説明会場の玄関前にパネルが並んでいた。村の風景写真の横に短いメッセージを添えている。〈守りたい「景色」がある。守りたい

あすへのとびら

### 新しい価値観が

二つの会は伊那谷をはじめ、県内外の有志や団体と協力し合って「理解と同意」を得るとしたJ

代以上の人たちが健在で、今のコミュニティには安定感や安心感がある」と言う。問題は、その世

代がいなくなつてから。人口が少なくなり、リニアまで通るとなれば「コミュニケーションが崩れていくよ

い価値観の芽が、この村で育つ

つあるように感じられた。

「理解と同意」を得るとしたJ

R東海は、大鹿村とどう向き合うのか。若い世代が見つめる未来を

ないがしろにはできない。